

# 呪いの メールアプリ

黒川 文





# 目次

|                            |           |
|----------------------------|-----------|
| 1. 第一の呪い                   |           |
| <b>1. 第一の呪い</b> . . . . .  | <b>3</b>  |
| 2. 第二の事件                   |           |
| <b>2. 第二の事件</b> . . . . .  | <b>11</b> |
| 3. 過去の教え子                  |           |
| <b>3. 過去の教え子</b> . . . . . | <b>19</b> |
| 4. 続く事件                    |           |
| <b>4. 続く事件</b> . . . . .   | <b>27</b> |
| 5. ひとりの生徒                  |           |
| <b>5. ひとりの生徒</b> . . . . . | <b>35</b> |
| 6. 呪いの連鎖                   |           |
| <b>6. 呪いの連鎖</b> . . . . .  | <b>43</b> |
| 7. 最後の命                    |           |
| <b>7. 最後の命</b> . . . . .   | <b>51</b> |



## 1. 第一の呪い



## 1. 第一の呪い

六月十日。月曜日。午後五時

学年主任の大西智子は自分の軽自動車を運転して八王子北警察署へと向かっていた。

——女子生徒が事件か事故に巻き込まれた可能性があり、身元のわかる人に誰か来て欲しいという電話があったのだ。

「なんであたしが呼ばれなきゃならないのよ！ もうっ！」

と、信号で停まるたびに、そんな言葉が口をついた。独り言だった。

中学校は杉並区内にあり、いかに放課後とはいえ、そんな遠方で何かしていたとは考えにくかった。運転をしながらも、先方から何を言われるのだろうか？ 何があったのだろうか？ そして自分は何をしているのだろうか？ と、色んな想いが胸の奥から次から次へと湧いて出ては消えて行った。

こんな目に遭うのは、ひとえに元の担任だった早川俊樹がゴールデンウィーク明けに休職を申し出たからだった。——もっと早く。例えば前年度の三学期末を持って休職とすることであれば、四月一日付で新しい教師が配属されていただろう。自分がこんな時間に遠く離れた警察署に呼ばれることもなかったはずだ。

タイミングが悪すぎた。

早川は真面目な青年教師だったが、一年時に担当したクラスが荒れに荒れていたことや、その親がいわゆるモンスターペアレント揃いだったことなどから、すでに昨年末頃から心の病ということで、月に何度か専門病院に通っていた。

学年主任としては彼に早めの休職を勧めるべきだった。と、今では反省している。

しかし、三十五人学級で三クラスの区立中学校だった。

一年のときの問題児など、ヤバそうな事態を避けるためにできる限りの配慮をつぎ込んだクラス編成をしたつもりでいた。が、しかし、やはりクラスの数に限られてくるとそれも効果を発揮することはなかった。最初の頃は何とか持ちこたえていた早川もゴールデンウィークまで持たなかったのだ。

——カーナビが目的地近くになったことをアナウンスして案内を止めた。

「うそ！　まだあるじゃない！」

ナビの案内がなくなると一気に行き先がわからなくなった。

段々と日が沈んでくる。嫌がおうにも心細さだけが増していった。

そこにたまたま通りがかったひとがいた。六十手前くらいの男性だった。チェックのシャツに登山用ズボンとリュックを二つ背中とお腹に背負っていた。

大西はクルマを道路脇に停めて男性に声をかけた。

「あの？　すみません。警察署はどこでしょう？」

「ああ、次の交差点の右手にすぐにありますよ。わたしもこれから行くんです。案内しましょうか？」

知らない男性をクルマに乗せるのには少し抵抗感があったが自分ひとりでは目的づく自信がなく、それに、年配の男性だし危険はないだろうと根拠のない安心をしていた。

「すみませんねえ。わたしも事故で警察に保護されたばかりだったのですよ」

と、男性はそう言った。

「え？　あなたも事故ですか？」

「ええ。話せば長くなりますが……遭難したのですよ。山の中で」

「そうなのですか？　おけがは？」

「病院で治療を受けたばかりなのです。警察からは終わったら調書を取るから来てくれと言われていましてね。それでこれから向かうところだったのですよ。もう、脚は痛いし傷口も痛みますし乗せてくれて助かりました」

男性の話によると、三日前に友人二人と山へ入り頂上まで登ったそうだった。

帰り道にひとりが転んで脚をくじき、もうひとりの肩を借りて何とか移動したと。そして、彼のリュックをこの男性が持ち、山を下っていたらしかった。救助を呼ぼうにも携帯電話の電波も通じないし、今、山のどこに位置しているのかもわからない。地図と自分たちのいる位置も違う気がする。もう遭難したとしか言い表しようがなかった。

そして、林の向こうに木々が切り広げられた場所があった。

——電波が通じるかも知れない。

仲間がそう言い男性は林の中に入って行った。

そして、そのまま仲間とはぐれてしまった。

たった、数分の間なのにだ。

幸い、脚をくじいた仲間のリュックの中に非常用食料と水が入っていて、三日間何とか死なずにすんだと言った。

「沢がありましてね。これで助かったと思いました。水の落ちる方向に向かえば遠いかも



知れないが川や池や湖にたどり着くのは確かでしょう？ それに道路があれば携帯電話も使えるかも知れない。わたしは心底助かったと思いました。で、そのときです」

男性は声色を変えた。

「何となく嫌な予感がしたのです。……沢の岩場の向こうに人体らしきものを見つけたのです。若い女の子が全裸で横渡ってたのです。でも、崖の上から落ちたと思われ頭部はぐちゃぐちゃに割れていて生きていないのは見た目にも明らかでした。……ああ、えらいものを見てしまった。わたしは後悔しました」

「死体発見者だったのですか？」

「ええ。電話が通じるようになったところでわたしは警察に通報しました。結果、わたしは助けられましたし、その被害者も発見されたのです。もし、わたしが偶然その沢にたどり着いていなければ、あんな場所です。誰も通りかけないでしょうし人目につくことはなかったと思いますよ。で、怪我もしていたので一旦は病院の救急外来へ行って治療を受けて、その後、調書を取りたいと言われていて、これから向かうところだったんですよ。あなたは？」

大西はえらいものを背負い込んでしまったと直感した。

事故に遭ったのがこちらの生徒と思われた。もしかしたら、その全裸の少女の死体がその生徒のなれの果てなのかも知れなかった。絶対に他人であってほしい。そう信じたかった。

男性の案内で警察署の駐車場までたどり着いた。

彼はお礼を述べてクルマを降り、正面玄関から入って行った。大西もバックで駐車しドアをロックして彼の後を追った。

地域課の窓口で連絡のあった警官の名前を告げて呼び出してもらった。

「すぐに参りますのでロビーの椅子に腰掛けてお待ちください」

と、女性警官は言った。

しばらく待っていると、さっきの男性が別の警官に呼び出されてどこかにあるのだろうか、会議室へと導かれていた。

「中学校の先生？ ですよ？」

四十代より少し若いくらいだろうか。男性警官が声をかけてきた。

「はい。何かわたしの所の生徒が事故に巻き込まれたとか？」

「ええ。登山の男性に見つけられたのです。遺体ででしたが。それで関係者を探そうとしたのですが、誰も見つからずに学校に電話をした次第なんですよ。ちょっと確認してもらえないでしょうか？」

「それは……いいですけど、でもどうしてうちの中学校とわかったのですか？ 遺体は

全裸だったと聞いていますが」  
「ええ？ 誰にそんなことを？」

警官は不審さありありで大西に尋ねた。

「さっき、発見者だという男性をクルマに乗せたんです。そのときの話を聞きました」  
「ああ。彼ね。……まあいいです。こちらへどうぞ」

警官は先に立ち、階段を下り地階にある一室へ大西を招き入れた。死体安置所という看板がかかっていた。彼は扉を開けると中には冷蔵庫が壁一面に設置しており、番号を確かめてからその扉を開けて手前に引き出した。黒いビニル製の遺体袋に入ったままベッドの上に置かれていた。

彼が遺体袋のチャックをちょっとだけ開けて大西に顔を見せた。見た瞬間ドキッとした。遺体を見る体験自体、普段の生活ではそんなにあるものではないし、頭部がぐちゃぐちゃだと男性から聞いたばかりだった。多分、ぐちゃぐちゃの部分は見えない様に気をつけてチャックを開けたに違いなかった。

顔を見ると確かに、大西が臨時的に担任をしている二年二組の女子生徒である山本奈緒美だった。何となく泥で汚れ、表情も歪んで見えた。大西は無意識のうちに視線をそらし、顔をそむけた。

「すみません。こんなことをさせてしまい。……生徒さんで間違いはないですか？」

「はい。こちらの生徒である山本奈緒美です。でも、どうしてこんな所で？ しかも死体でなんて？」

「それは、これから捜査します。ちょっと彼女の家庭環境などを教えてもらいたいのですよ。何せ家族とは全く連絡が取れないのです。ようやく探し当てたのが中学の担任だけだったという事情もありましてね」

「あの？ うちの生徒だと言うことはどうやってわかったんですか？ 遺体は全裸だったのでしょうか？」

「ええ。遺体発見時に周りを調べ上げました」

「崖の上ですか？」

「ご存じでしたか。……そうです。崖の上から転落したものと思われました。ただ、誰かに突き落とされたのか、自分で誤って落ちたのかは今後の捜査でわかると思いますが。実のところ崖の上には彼女の制服や下着や靴、そして所持品と思しき通学鞆とその中身が散乱していたのです。遺体からは男性の体液が検出されています。現在、DNA鑑定をして過去の強姦事件の犯人に該当者がいないかを検査中です」

「ええ！ レイプ事件だったのですか？」

「恐らく。そして財布やスマートホンの類は見つかっていません。失礼ですが中学校ではそれらは所持を認めていますか？ あれば、誰かに盗まれたかした可能性があります」

中学校の教育方針に関する内容だった。大西は慎重に言葉を選んだ。

「給食だけでは足りないひとに限り、お昼にパンを買うことを認めています。ただし、大金の所持は禁止です。小銭だけです。スマートフォンは緊急事態のときのために所持は認めています。ですが、校内での使用は禁止しています」

「では、彼女が財布とスマホを持っていた可能性はあるのですかね？」

「多分。持っていないのも不思議ではありません。盗られたのでしょうか？」

「それはわかりません」

「そしてレイプされたと？」

「崖の上の林で衣服が脱ぎ散らかされていて、鞆の中身も物色されていました。そして、体液。同意があったのかどうかは今の時点ではわかりません。……もうひとつお聞きしたいのですが？」

「何ですか？」

「彼女の家庭環境です」

「ああ……」

これも本来なら早坂俊樹が管理していた情報だった。

大西も彼の休職時に申し送り事項にさっと目を通しただけに過ぎない。

山本奈緒美は母子家庭であり兄弟はいない。母親は昼間と夜間に仕事をしていた。連絡が取れるのは深夜か早朝しかない。月に二度ほどオフの日があるので、三者面談などはそれに合わせて行っていた。

ただ、普段の行動については特記事項があった。

クラスの中で一番の問題児であり、比較的大きないじめグループのリーダー的存在だった。いじめの内容はかなり酷いものだったと記録にはあった。被害者からの申し出を書き留めただけの文書だった。客観的な証拠がなければ学校や教育委員会が管理する実態調査へは進まない。

大西はざっと説明した。

「ふうん。なるほどねえ。いじめの対象者は男子女子両方ですか？」

「いや、女子……クラスの中でも目立たない子が標的になっていたと思われれます。実情についてはこちらでも把握出来ていません」

「そうですか？」

結局、親とも連絡が取れないので中学校に連絡したみたいだった。

なぜこっちに？ と、最初に思ったことは遺留品が答えを示していた。脱がされたと思われる制服ブラウスに名札と校章が安全ピンで留められ、鞆の中にも名前を明記した教科書やノートがあったのだ。警察だったらどこの中学校かはすぐにわかるのだろう。そんなことより、これから彼女の母親にどう説明しようかと、先の段階に想いは行っていた。



## 2. 第二の事件



## 2. 第二の事件

六月十二日。水曜日。

山本奈緒美の件を教頭と校長に報告し、やっと自分の手を離れたと思っているところに緊急を知らせる電話が入った。駅構内の事故だという。そして、電話を切らないうちにまた別の電話から事故の連絡が入った。こっちは生徒とダンプとの接触事故だと言うことだった。

「もうっ！ どうなっているのよ！」

受話器を手で押さえ、大西は我が身を呪った。

側にいた年配の女性教師は……口元を押さえ「大変ねえ」とつぶやいた。

「あの、松野教頭。駅の方は行ってもらえないですか？ 交通事故の方はわたしが担当しますから。もし、何事もなければ、後でそっちにも回ります」

「ううむ。こちらも忙しいのですよ。担任はあなたでしょう。何とかしてください」

そう言われ、大西は叫びたくなるのをぐっところえた。

一度に二つも事件を抱えることは実際には不可能だった。どちらかを優先する必要がある。一番問題が大きいのは駅の事故だろう。長引けば多くのひとの足を止めてしまう可能性があった。最終的には遺族へ損害賠償が求められるだろうが、できる限り被害の拡大を食い止めてあげたい。

ダンプとの事故であれば、生徒は完全に被害者の立ち場だ。

大西は小走りで駅へと向かった。

すでに改札口は大勢の人でごった返していた。

これから鉄道を利用しようとした人と、事件を知って集まってきた……いわゆる野次馬だ。そんな感じで混乱の極みだった。大西は非常線を張って警備している交番巡査に学校の担任であることを告げた。

「あんたが先生？ 来て」

彼は仲間が無線で連絡を取っていた。非常線のテープを少しだけ上げて通してくれた。

線路の上では駅の職員と警官が大勢集まっていた。

事故の全容を把握して、事件性のありなしを判断する。何もないならば駅員たちが総出で事故後をきれいにしていくのだ。

「あの？」

と、現場を指揮していると思しき警官に声をかけた。

「むっ！」

と言ってこちらをにらんだが、やがて学校の教師であることを察知したようで表情が変わった。

「ご覧の通りの有様ですよ。でも、遺留品がホームに残されていました。鞆と靴の片方」

「あっ！」

「そちらの生徒さんで間違いないですね？」

「はい。……これは事故なのでしょうか？」

「今のところ、飛び込み自殺と巻き込まれ事故の両面で捜査しています。何か生徒さんの事情はご存じないですか？」

鞆の中には名前の書かれた教科書やノートがあった。

青山ともみ。確かに二年二組の生徒だった。遺体は……電車の車輪で引き裂かれ、原型をとどめてはいなかった。大西は先日の山本奈緒美のときより大きなショックを受けた。少し気持ちが悪くなり吐き気を催した。

「おい。君！」

その警官は大西のショックを察したのだろう。部下の警官に大西の介助を委ねた。女性警察官に肩を抱かれて駅長室へと招き入れられた。エアコンが効いていて明るく、また、ソファがあり座り込むことが出来た。駅員のひとりがペットボトルの水をくれた。しかし、吐き気が収まらず口にはしなかった。

しばらくして、さっきの警官がやって来た。

「それで、この生徒さんのことです」

「ああ……」

彼女のことも引き継ぎ資料の中にちゃんとあった。

山本奈緒美の取り巻きだった生徒だ。証拠はないが普段のいじめに参加していたのではないかと思われた。一応、ちゃんとした家庭の子供ではあるが親が再婚であり、彼女は母親の連れ子に当たるということだった。成績は中の下。

そう警官に説明しながら、ひょっとしたらダンプの事故の方の被害者は同じ山本奈緒美のグループではないかという不安にも満ちた想像を巡らせていた。

「この青山ともみ……さんですか？　この子が走ってくる電車に飛び込む理由に心当たりはありますか？」

警官にそう問われて大西は首をかしげた。



大西の情報はあくまでも早川俊樹教諭が書き記した引き継ぎ資料のものしかない。彼以上にクラスのことを把握している人はいないのだ。わかっているのはいじめグループのメンバーだったこと、家庭環境のこと、そして成績のことだ。もっとも、成績を苦にするのはもっと後だろう。中三の二学期当たりになり改めて実力テストの偏差値などと志望校のレベルを付き合わせて自分の無力感に気がつくのだ。成績のことが原因で電車に飛び込むのはその後のことだろう。

大西の知らない何かがあったとしたら？

考えられるのはそのくらいか、いや、実際には事件の可能性も否定は出来ない。

いじめグループのナンバーワンだった山本奈緒美の取り巻きだったのだ、それなりにあちこちで恨みを買っていきそう。いじめられている女子と、彼女に気がある男子たち。だとしたら誰が候補者になるだろうか。

「いや。先生。その線は薄いと思いますよ」

と、警官は戸惑う大西にそう言った。

「事件ではないと言うことでしょうか？」

「状況的にはそうお思いになるのは無理ありません。教え子が自殺するなど担任教師としては極めてショックでしょう。ですが、ホームの監視カメラを見る限りにおいては、電車の入って来た同時刻に、彼女の背後には誰も立っていません。背後から押せた人物はいないのです」

「では、自殺と断定されると？」

「いや、もうひとつ。病気などもあり得ます。立ちくらみやめまいなどでよろめくこともあるでしょう。そのときたまたま運悪く電車とぶつかった。あり得ない話ではないと思いますよ。それで自殺の動機がないのかお尋ねしたのです」

「中学二年生という難しい年頃であるのはご存じの通りです。ですが、まだ一学期が始まってすぐなのです。険しい山だったと気づくのは夏休み明け以降だと思います。でも……」

「何です？」

「ゴールデンウィーク明けも割と精神的にシビアな時期でもあるのです。これは経験上からも言えます。緊張感のあった新学期から、少し距離を置く季節なのです。しかも結構長い期間です。また、元の日常に引き戻される。やっぱり、不登校になったりあるいは……ということも結構増えることも」

「ふうむ」

警官は大きな手で自分のあごをさすりながらため息を漏らした。しかし彼女のかかりつけ病院に問い合わせ、めまいや立ちくらみを起こすような既往症があるかないかを確認して、なければ自殺でファイルクローズになるかも知れないと言われた。

そして、もう一本の電話があったダンプとの事故に向かった。  
携帯電話で他の職員と連絡を取りながら、近くの救急病院へと走って行った。  
救急外来入り口の守衛に事情を話して中に入れてもらおうと、大勢の患者と付添人で  
ごった返していた。それだけ事故や急病が多いということだった。近くにいた看護師に  
ダンプとの接触事故の被害関係者だと告げると、廊下沿いにある病室のひとつに案内さ  
れた。こっちにも警官が何人か立って部外者の侵入を監視していた。

「あの！　山野中学教師の大西智子と言います。こちらに生徒が運ばれたと聞いたので  
すが？」

そう言うと警官は身分を確認するものを要求した。

免許証と校内で使う I Dカードしかなかったが、これで信用されたみたいだった。

「どうぞ」

彼はそう言いドアを開けてカーテンを引いた。中には頭まで白い布で包まれたけが人  
が横たわっていた。看護師が医療機材の撤去と遺体……となってしまうらしく、清拭  
作業にかかっていた。ただ、怪我の痕跡は事故の重要証拠となるため警官がいちいち監  
視していた。

身体中がボロボロで誰だかわからなかったが、女子生徒のようだった。枕元に置かれ  
たトレイの中に持ち物が置かれていた。中学の制服でブラウスには名札と校章が留めら  
れていた。遺留品の鞆は別の棚に収められている。

「山野中学二年二組の川島麻里香さんで間違いありませんね？」

と、横にいた警官から問われた。

大西には誰かよその子であって欲しいと言う気持ちしかなかったし、この身体中に黒  
いあざが残り手足が折れて顔を見ても誰だかわからないご遺体が誰なのか、全く想像も  
つかなかった。遺留品が川島麻里香だと指し示していると言うのならそれはそうなのだ  
ろう。少なくとも、元の担任の早川俊樹教諭以上の情報は持っていなかった。

「先生。ちょっと疑問に思ったのですがねえ」

と、年配の刑事みたいな人が入ってきた。

「疑問と言われてもわたしも混乱の極みです。何もわかりません」

大西は泣き出したい気持ちをこらえて言葉を返した。

「学校から半径五百メートルにあるあの道路は時速三十キロ制限がかかっているでしょ  
う？　他のクルマは皆守っていますよ。あんな大型ダンプが八十キロも出して走ってい  
たなんてこれまでありましたか？　保護者さんの目撃証言でもいいです」

——まさか！　と大西は思った。

運転手のモラルの問題ではないと思った。

住宅が入り組んだ町でもあり、道路も右や左に折れ曲がっていてその上狭いのだ。対向車が来たら少し待たなければならぬほど。そんな場所にそもそも大型ダンプのような大型車両が入り込むなどあり得なかった。現に中学校の工事を夏休み期間中に行うときなど、付近の住民に日時を伝え、安全運行を指導の上で規律正しく作業してもらったのだ。

そんな場所に時速八十キロで。

絶対にあり得ないと思った。

そもそもそんな速度であの道を通すのはレーザーでも無理だ。

「実際に監視カメラ映像からの解析では確かに時速八十キロが推定されています。そんな速度の大型車両に跳ね飛ばされたのです。無事ではすみません」

「ああ……」

大西は頭を抱えた。

一昨日の山本奈緒美といい、さっきの青山ともみといい、この川島麻里香も。

こんなに続けて事件や事故に巻き込まれて死ぬなんてことがあるのだろうか。偶然とは思えなかった。全ては悪い夢なのだろうか。それとも、本当に偶然の出来事で神様がたまたま臨時の担任となった学年主任のわたしに意地悪をしたのだろうか。

「刑事さん。こんなに続けて死亡事故が相次ぐなんてことはあり得るのでしょうか？」

「ええ？ わたしが聞きたいですよ。でも、事故や事件では年間二千人からが亡くなっておいでです。確率はゼロではありませんよ。まあ、担任教師としては運が悪かったとしかいいようがないですなあ」

その後、大西は警察署へ呼ばれた。調書を作りたいと言われたのだ。

何かあれば調書、調書、そして調書。

こんなものの作成に呼ばれるなんて、普通の人なら一生のうち一度くらいしか、いや、経験のないまま寿命を終えるひとの方が多数派だろう。

警察署に行ってみると、廊下でひとりの老人が腰掛けていた。

「あんた学校の先生？」

「あ、はい。調書を作りたいと呼び出されたんです」

「ふうん」

「あの。おじいさんも呼ばれたのですか？」

「ああ、第一目撃者なんだそうさ。他にも見ている人は何人かいたけどねえ。なんてわしなんだか。面倒だねえ。犯人が捕まって裁判になったらまた呼び出されるんだろうかね。それも嫌だねえ」

「やっぱり、ダンプが八十キロも出していたのですか？」

「正確な所はよくわからない。だけど、ものすごいスピードだったよ。道を歩いている中学生も……でも、道一杯に広がって喋りながら歩いていたんだ。もうちょっと安全教育

をした方がいいんじゃないかなあ」

「それは……確かにそうです。他の子はやっぱり中学生でしたか？」

——他にも歩いていたのだ。なぜ川島麻里香だけが跳ね飛ばされたのだろうか？ 一緒にいた他の子にはかすりもしなかったと言うことになる。八十キロ。すごい威力だと思われた。

「運転手は……見えなかった。最初は」

「ええ？ どういうことですか？」

「多分、スマホか何かを操作していたのだと思う。それを落として拾おうとしたのではないだろうか。かがんでいたから前が見えなかったんだろうな。なぜだろう？ あんな道でスマホをいじるのも不謹慎だし、それを落としたのなら一旦ダンプを停めるべきだろう？ なぜ、走り続けたんだ。それが不思議でならないんだ」

「跳ね飛ばされたのはおじいさんの目の前だったんですか？」

「もうひどいものだったよ。体が折れ曲がりあちこちにぶつかって、もう人間の姿をしていなかった」

「救急搬送されたんですよね。まだ、生きていたと思うのですが？」

「いいや。あれで生きているなんて不可能だ。身体中の骨が折れていたと思う。皮だけでつながっていた。救急隊員はなぜか病院へ搬送した。普通、家でお年寄りが亡くなったら搬送は拒否されて警察を呼ばれるだろう？ なぜか彼らはそうしなかった。不思議でならない。……もっとおかしいのは運転手だ。正面のガラスが割れるほどの衝撃だったのにそのままの勢いで止まることなく、そのまま逃げてしまったんだ。あんなのすぐに捕まるだろうなあ。ああ、そのために調書がいるのか。先生の証言も裁判のときに使うんじゃないかなあ」

大西はどきりとした。

全くあり得ない出来事が目の前で粛々と進んでいたことになる。

最初から川島麻里香を狙っての犯行と考えたら、ある程度あり得る話だ。

しかし、よっぽどの知り合いでもなければ、道一杯に広がってお喋りしながら歩いている中学生集団の中から川島だけを選び出すのは不可能だろう。そして、跳ね飛ばしそのまま逃走した。

### 3. 過去の教え子



### 3. 過去の教え子

午後七時。

大西は駅近くのファミリーレストランで待ち合わせをしていた。

かつての教え子である吉本りりかから誘われたのだ。

中学を卒業してもう四、五年になるだろうか。今は電子系の専門学校生だと言っていた。来年の春には卒業して就職するそうだった。在学中は吉本は大西によく懐いていた。それで毎年年賀状も届くし、たまに会うこともあった。

ドリンクバーでジュースを入れていると彼女がやって来た。

「先生。お久しぶりです！」

「お久しぶり！　元気してる？」

「ええ。まあまあです。最近、演習やレポートが難しくなってきた、ちょっと進路を間違えたかななんて思っているんですよ。愚痴を聞いてもらいたくて……」

「あんた昔から愚痴ばかりだったじゃない？」

「えへへ。そうでしたっけ」

彼女も席に着くとドリンクバーを頼んだ。

「何か食べなさいよ。おごるわ。クルマだからお酒は飲めないけどってあんたもまだ二十歳にはなっていないわね」

「そうなんですけど、友達はみな飲んでますよ」

「そういうことしちゃ駄目なの！」

「はあい。何頼もうかなあ？」

彼女は愚痴を聞いてもらいたいと言いながらも結構明るかった。

忙しいとか、勉強が大変というのも興味のあることややりがいのあることなら、割と平気で乗り切れるものだ。その反対は地獄だが。そして、逆に大西が話を聞いてもらう立場になってしまった。

「ふうん。そうなんですかあ……」

「あまり驚かないのね？」

吉本はもぐもぐとご飯を食べ、合間にジュースを飲んだ。

「だって事故でしょう？　あり得ない数字ではないと思いますよ」

「まあ、確率から言うとそうなんだけどね。でも、実際目の当たりにすると、確率だからなんて思えないのよ」

「確率的にあり得ないとすると、それって必然と言うんですか？ 狙った上での犯行と言うことにしかならないじゃないですか。誰か裏で殺し屋みたいなのが動いていることに」  
「ええ？ いくら素行がよくない子たちとはいえ、ただの女子中学生よ。誰が命なんか狙うのよ。有名人の子供というのでもないし、狙う理由が見つからないわ」  
「その子たちの親って何をしているんですか？」

ひとりはシングルマザー。青山ともみは親が再婚して義理の父親は会社員だ。そして、川島麻里香の親も自営業の父親を再婚の母親が手伝っているといった環境だった。

「あたしのママもバツ2なんですよ。先生は知らないかもですが」

「そうだったの？」

——ファイルでは母子家庭としか記載がなかった。

「うん。ママが二度目の結婚をしたときに出来た子供なんです。その後、離婚して今はひとりですけど。でも、別れたときの話を聞いたことあるんですけど……そんなこと？

って思ったことだけ覚えてるんです。もう、自分勝手もいいとこで、そんなことで怒りだしたら却って男の人が可哀想というんですか？ 世の中不条理だなあなんてつくづく思いました。あたし今専門学校じゃないですか。学費って元のお父さんから出してもらっているみたいなんです。今の生活もあるはずなのに、あたしの学費までなんて、なんだか申し訳なくて……」

と、言って少し下を向いた。「先生は結婚しないんですか？」と、小さな声で尋ねた。

「ううん。最初は職場結婚とか考えていたんだけど……もたもたしている間に四十八歳になっちゃった。あはは」

「そんなに高齢でもないと思いますよ」

と、取って付けた言い方をした。

「そう言えば、りりかちゃん。あなた中学のときオカルトマニアだったじゃない？ いつから電子系になったの？」

「ええ？ オカルトですかあ？ そんなの冗談で言っていただけですよ。友達に受けるんです。それだけです」

「ふうん。でも、わたしの話に驚かなかったじゃない？」

「それは、まあ」

大西は話をしながら何度もスマートホンの画面に目をやった。

「先生。お忙しいのでは？」

「ああ、気にしないで。この所の事件のせいでなんか恐怖症になってしまって。いつ、また事件で呼び出されるんじゃないかって……」

「実は……呪いの携帯とかアプリとか、噂では聞いたことあるんです。闇《ダーク》ウェブの話なのであんまり信憑性はないんですけど」

「え？ それはどんなの？」

「なんかですね。学校や職場でいじめられている人って結構多いじゃないですか？ 学校だといじめですし、仕事だとパワハラとかセクハラとか」



「うんうん」

「そんな人のところに広告メールやメッセージが入って『恨みを晴らします』みたいな話をして、それでその携帯とかアプリとかを売り込んでくるそうなんですよ」

「それは怪しげよね。そんなの買う人いるのかな？」

「それが.....結構アクセス数は多いみたいなんです。あたしの情報網に引っかかる位なので、もうよっぽど多いと思います。でも.....ちょっとお高いんです」

「幾らくらいなの？」

「日本円だと四、五万で海外だと三から五百ドルくらいでしょうか。サラリーマンなら出せると言うんですけど、中高生だとちょっと出せないですよ。それに怪しげだし」

——もし、そんなものがあって実際に効果があるとしたら、もしかしたらこれら一連の事故や事件が可能かも知れない。大西は首をかしげた。

でも、仮にそんなので呪われて死んだとすれば、ある意味可哀想な気もする。

同級生をいじめたり、あるいは教師に反抗したり、悪事を働いたとしても中学生のすることだ。命まで取ろうなんて言うほどのものではない気がする。

四、五万と吉本りりかは言った。

確かにお高い。

しかし、現状のいじめやパワハラから逃れられるとしたら？ どのくらいの需要があるのだろう。本来なら普段の人間関係を良好に保ち、そんな関係にならないようにするのが大人の知恵だ。でも、それが出来ない人がいる。相手を消してしまうことで問題を一気に解決するのだ。悪魔の誘いだっただ。

「でも、そんなもので人間関係の悩みってなくなるものですか？ 先生」

吉本はしみじみとした口調でそう言った。

嫌な奴を消すだけでは根本的解決にはならないものだ。嫌な奴は次から次から出てくるし、その度に同じ対応をしてしまうとするならばだ。最悪、自分が世界の最後の一人になるまで続くことになる。結局は自分が変わるしかないのだ。そうしてひとは大人になっていく。

「そうね。もし、本当に悪魔の生まれ変わりみたいな悪人がいて、そのひとが皆を苦しめているとしたらそんな論理もありかも知れないわよね。でも、実際はそうじゃない。その人の嫌な一面を見ているだけ。相手を消すのは現状から逃げることにしかならないと思うわ。りりかちゃん。誰か消したい人っているのかな？」

「ううん。それはあたしだって人間ですもの。一人や二人は.....ああ、冗談ですよ。あはは」

「でも、こんな情報ってどこから出てくるの？」

大西が本質的な質問をすると吉本は少し言葉を濁した。

「やっぱり恨みとか復讐とかのキーワードで検索すると引っかかるんです。実はあたしも……そういう人がいまして。でも、本心ではないんです。ただ、もし可能ならいなくなっって欲しいって思うこともあるんです。明日の朝に学校に行っって、そいつがいなかったらどんなに清々するだろうかって」

「実行に移さないだけまだいいわ。そんなこと絶対にしちゃ駄目だからね」

「うん。先生がそう言うなら」

「でも、あんたの周りでもそんなことあるの？」

大西はハンバーグを切って口に運んでいる吉本に尋ねた。彼女はそのままゴクリと飲み込んでしまい、後から水を飲んで流し込んだようだった。こほんと咳をした。

「それは……」

「何か知っているの？」

「この呪いの携帯とかアプリのことですよ？」

「ええ。そうよ」

「実は、一年生の後期のときでした。一人だけ変な人がいたんです。いわゆる空気が読めないといいますか、他人の嫌がることばかりして。それでいて偉そうにしている、他人を貶めることを平気で口にするんです。皆から嫌われていて、クラスでも浮いていたんです。でも、本人はそんな自覚がさらさらなくて『真の天才は孤立するものだ』みたいなことを言っってものすごく大きな態度だったんです。で、その人と演習のパートナーっであるんですけど……二人か三人の班に分かれて課題をクリアする作業なんです。その人と一緒になった子が真剣に悩んでいたんです。もう後期がまるまるその人と一緒だと思っって耐えきれないっって言っっていました」

「ああ、毎年クラス分けで苦労しているのだけど、そんな子はざらにいるわよ」

「でも彼女は特別でした。もう顔を見るだけでうんざりなんです。朝、学校で姿を見なければ、ああ、休みなんだと安心するといいますか、そんな感じだったんです」

「まあ、いいわ。その子が呪われたというの？」

吉本は目の前のジュースを手に取り、少し口にした。

いけないことを語るに当たっって舌を湿らせる。そんな感じだった。

「演習パートナーの子から聞いたんです。『大変なことをやらかしてしまっった』っって」

「大変なこと？ まさか呪いのアプリ？」

「はい。それでした。あたしもまさか本当にそんなものがあるっって言うこともビックリでしたし、それを実行したという事実にもショックでした。極めつけがその子が現実に事故に遭っって亡くなっってしまったんです。その後、本人のお葬式にも同級生全員が出席したんですが、母親が半狂乱になっっていて、もう、どうしたらいいのかわからないくらいだったんです」

「ふうん」

「でも、悲劇はそれで終わっりませんでした」

「ええ？　　どういうこと？」

吉本はカチャリと音を立ててテーブルの上にナイフとフォークを置いた。そしてうつむいた。——ひょっとしたら思い出したくもない出来事だったのかも知れない。でも、それは同じクラスだったと言うだけの浅いつきあい。「大変なことをやらかした」本人だけの問題だろう。

「友達も事故で亡くなってしまったんです。最初のお葬式の……一週間くらい後だったでしょうか。突然の出来事でした。まさか、呪いが返ってくるなんて思いもしませんでしたし、その携帯かアプリかにそんな『副作用』的なものがあると言うのも聞いたことはありませんでした」

「でも、人を呪えば穴二つということわざもあるわよ。呪いなんか行使したら必ず本人にそっくりそのまま返ってくるものなの」

「本当にそうでしょうか？」

「どういうこと？」

「本人は呪いがかけられて事故に遭ったことを知らないはずなのです。だから、返ってくるというのもあまりピンと来ませんでしたし……自分で自分を呪ったみたいなき感じでしょうか。よくわからないんです。でも、このことは同じクラスの子しか知りません。皆がその件に関してはおびえていて、いつか、自分たちにも返ってくるのではないかと、ずっと心の重荷になっていたんです」

「でも……本当の所は？　見当はついているんじゃないの？」

「ああ。あのときみんな話をしていたんです。……もしかしたら最初の子のお母さんがあの子を呪ったのではないか。そんな内容でした」

「お母さんに娘の仇《かたき》だと思われるきっかけはあったの？」

「いいえ」

吉本はうなだれた。「多分ですが……」

「話してみて？」

「消去法だったのかもと」

「消去法？」

「はい。娘のことをよく知っていて、よく思われていなくて、会いたくもなくて、いなくなってくればいいなんて思っている人ってそんなにいるものではないですよ。そうなると同じ専門学校で同学年の同クラス。そして、演習のパートナーだった子。娘の態度が悪かったのは知ってはいたものの、死ねばいいときえ思われるとなると、人間関係を見れば大体のあたりはつきます。その子以外にそこまで恨む人っていなかったのだろうなって」

「なるほどね」

大西は深くため息をついた。

すでに亡くなった三人の生徒たちの他にも、そうした呪いのアイテムが関与している事案があったのかと、改めて嘆息する思いだった。目の前の吉本も最初はこんな話をするつもりなかなかったのだろう。すっかりしょげていた。大西は話題を切り替えようとしたが、一旦、沈んでしまった彼女の姿をみて、今日は切り上げようと思直した。

## 4. 続く事件



## 4. 続く事件

六月十九日。水曜日。

大西は授業の準備をしていた。

職員室を出ようと腕時計を見ていると、教頭から呼ばれた。

「大西先生。ちょっと」

彼は大西を見て手招きした。校長室へ行くみたいだった。

「大変なことになりました」

と、校長は切り出した。「今朝、生徒の親から電話がありました。昨日から行方不明だったのだそうです。厳密には昨日の朝、学校へ行くために家を出てから帰ってこなかったと」

「ええ？ 誰ですか？」

「二年二組の早川やおいと松島玲奈の二人です。二人が同じ行動をしていたのか、別々に事件にあったのかは不明です。夕方、帰宅しなかったことから親御さんと近所の人が付近を探し回ったそうです。そして、深夜0時になっても行方が知れなかったために、警察署に捜索願を提出したということでした」

「二人も？ 同時に？」

「大西先生。彼女たちの普段の態度に何か変わったことはなかったですかね？」

教頭は威圧的な口調で言った。

「もちろん、今月に入って山本奈緒美さんと青山ともみさん、川島麻里香さんが連続して亡くなったことで、クラスはかなり動揺しています。元々このクラス自体に問題はありました。確かに」

「いや、この期に及んで言い訳や予防線を張るのはやめていただきたいですな」

「前任の早川先生も心労がたたって休職なさったくらいです。かなり問題児の多いクラスだったんです。二年のクラス編成を行ったときに、彼ら彼女らをできる限り分散させました。でも、三十五人学級で三クラスしかないのです。分散させるにも限度がありますし、分けたら分けたで、新たなワル同士の出会いも生じさせています。実際、親からの苦情は……ああ、亡くなった生徒に関してはかなりの言われようでしたが、その他の生徒に関しては今のところ大きなものはありません」

大西の言葉に校長と教頭はちらりと相手を見て、そして「ふううっ！」とため息を漏らした。なぜこんなことになってしまったのだろうか？ その問いに対する答えは誰も持ち合わせてはいなかった。偶然？ いや、そんなはずはない。もしかしたら神様のいたずらという極めて特異な現象だったのかも知れない。

確かにコインを五回投げて五回とも表が出ることもあるだろう。

だからといって「そのコインにはカラクリがある。偽物のコインだ」という人はいない。たまにそんなことくらいは起こり得ると考えるのが自然だ。しかし、これはコイン投げではない。人の命の問題なのだ。五回続けて「表でした」とは、実際に子供が亡くなった親の前では絶対に言えるものではない。

話している間に職員室から電話が転送されてきた。教頭宛なのか大西宛なのかはよくわからない。

「もしもし」

と、教頭が電話口に出た。そして、真っ青な顔になった。

「大変ですぞ！ 校長先生！ 大西先生！」

教頭は口から泡を吹き出しそうな勢いだった。

行方不明の女子生徒二名が見つかったそうだった。

しかし、安堵の気持ちにはなれなかった。二人とも死体で発見されたという。

早川やおいは、体にコンクリートブロックをロープで結びつけられた格好で川の底に沈められていた。そして、松島玲奈は廃墟となった工場跡地で冷たくなっていた。首にロープが結びつけられていた。

「どう考えても犯罪に巻き込まれたとしか言いようがないではないですか！ 大西先生！」

と、教頭は大西に食ってかかった。

「ええ？ どういうことですか？ もう、わたしには訳がわかりません。頭を冷やしてきたいのですが、ちょっとだけいいですか？」

「駄目ですよ。大西先生。至急対処して下さい。担任なのですから」

と、校長が口を挟んだ。

元の担任の早川俊樹教諭が心労で入院してしまったのが、今となっては正しい選択だったと心から思っていた。彼でなくても心が折れてしまいそうだ。大西自身、今のところは緊張感が辛うじて精神を正常に保ってくれてはいたものの、もし、事件が一段落してこのまま一学期が終えられれば、その場で倒れ込んで、早川と同じ病院に入院してしまうかも知れなかった。

また、警察署へ行き身元確認と称して無残な遺体と対面して、何本もの調書を取られ



るのだろうか。そう考えると、この場で倒れた方がよっぽど楽だという気持ちすらした。でも、目の前の教頭のいらついた顔を見て文句を言えるほど気が強くはなかった。

自分の席に戻り、机の引き出しからクルマのキーを取り出した。バッグを持ち駐車場に向かう。そして軽自動車に乗り込んで警察署の位置をカーナビでセットした。

早川やおいが運び込まれた荒川東警察署に着いたのは午前十時前だった。

警備の巡査に会釈して中に入る。地域課の受け付けで用件を伝えて、担当の警官を呼んでもらった。

「ああ、学校の先生ですか？」

と、二十代半ばくらいの女性警察官が出て来た。

「すみません。何度もご厄介をかけます。山野中学の大西智子と申します」

「何度も？ 生徒さんは今回が初めてですよ？」

と、警官は不思議そうな目で大西を見た。

——ああ。と大西は思った。

警察署は日本中、そして都内に点在しているのだ。情報は共有しているのだろうが、管轄地が違えばまるで違う組織なのだ。よって、ここに眠る女子中学生の遺体は彼ら、彼女らにとってはこれまでの悲劇とは違うシリーズだったのだ。

「こちらの生徒だと伺って来たのですが？」

大西は気を取り直した。

「すみません。身元を表すものがあんまりなかったのです。近くに落ちていた鞆の中にあつた教科書やノートから、そちら様の中学の生徒ではないかと推定した次第です」

「そうだったのですか？」

と、言うことはもしかしたら違う学校の生徒かも知れない。そこにわずかな希望があつた。しかし、あつという間にその希望は打ち砕かれるばかりか、もっと悲惨な事情を目の当たりにすることになった。

警官は大西を遺体安置所へと案内した。

黒いビニル製の遺体袋の中に収められていたのは、以前と同じだった。

こんなことに慣れっこになっていいのだろうか？ 少しだけ大西は疑問を持った。

「こちらです」

と、警官は言いビニル袋のファスナーを遺体の頭から胸元まで見せた。そのとき、大西は早川の遺体が全裸であることに気がついた。

「ああ」

「どうですか？ 間違いないですか？」

警官は立ちくらしそうな大西の背中に手を当てて、それでいて事務的に遺体に間違いがないかを問うた。

「間違いありません。山野中学二年二組の早川やおいです」

「そうですか」

彼女もホッとした表情になり、また、ファスナーを上へ移動させた。

「一つ聞いてもいいですか？」

「何ですか？」

「この子のことです。全裸で発見されたのですか？」

「ええ。そうですよ。でもここで全裸なのは皆そうです。検視のときに衣服を脱がせるんです」

こんなことは彼女にも慣れっこのような言い方だった。強盗強姦。死体損壊。そして遺棄。ご丁寧にコンクリートブロックをロープで結わえていた。朝方に川原を散歩していた近所の老人が川が浅くなっている所に人のような影が浮かんだり沈んだりしているのを発見したのだそうだった。

「やっぱり強姦されていたのですか？」

「検視時に性器内から男性の体液が検出されていたと報告書にあります。そして、財布やスマホと言った所持品がなかったと。これは中学では持ち込み禁止とかされていますかね？」

と、以前聞かれたようなことを言われた。大西は持ち込みはOKだと返事した。多分、犯人が持ち去ったのだろう。

「すみませんね。この被害者さんの普段の生活態度や交友関係について調書を取りたいのですが、お時間はいいですか？」

と、断れないのにそんなことを尋ねた。大西はうなずいた。

もううんざりを通り越していた。警官は大西に質問して、そして返事をそのままパソコンに打ち込んだ。全部書き終わるとそれをプリントして大西に提示した。内容に間違いがなければ下の欄に署名と捺印をしてくれという。最初のうちは緊張感があったが、もう慣れっこの気分だった。さっと目を通して生徒の宿題と同じ様にサインして判子を押した。

次は太田南警察署だった。

松島玲奈の遺体が眠っているはずだった。

大西は軽自動車で移動し、同じ様に遺体の確認をさせられ同じ様に調書を取られた。

仕事が終わりに、帰ってもいいですよと言われ、廊下を歩いているとこれまでの一連の出来事が脳裏にフラッシュバックした。思わず、ううっと強烈な吐き気を催した。途中にあったトイレに駆け込み便器の縁をつかんで顔を突っ込み胃の中のものを全部吐き出

した。

「ちょっと大西さん！ 大丈夫ですか？」

出口まで付き添ってくれていた警官が慌てて声をかけた。

でも、大西の心配などではないことは、もう十分わかっていた。署内で倒れたりと言った面倒を起こされたくないだけだ。

——ちょっとくらはは休みたい。

大西は激烈な疲労感に襲われていた。

入院してしまった早川教諭の気持ちが痛いほどわかった。

あのときは生徒の連続死なんかはなかったものの、一年の一学期からずっと問題行動ばかりが起こっていたのだ。その度に担任の責任を問われてあちこちに謝りに回ったり、事情を説明に回ったりを繰り返していた。話のわかる人なんか全体の一割にも満たない。

——そう。ごめんなさいで済んだら、警察はいらないよ！

そんなことを何度も言われ、それでも謝り倒していたのだ。

しかも、謝るのは担任教師だけで、やらかした生徒は知らん顔でやり過ごしていた。まるで他人事。そして、帰り際気分が悪いと言いだし、教師と離れ、隠れてタバコを吸っていたと聞いたときには……やはり、非難の向かう先は担任教師だった。

事件の度にこの顛末をまとめた「始末書」めいた書類を作成し、その再発防止策とそれを徹底させる施策の案を作り学年主任、教頭、校長経由で区の教育委員会へ提出するのだ。もう、授業の準備とか楽しく学べる工夫とか、教師らしい仕事にはまるで手が回らなくなっていた。

次は誰が何をやらかし、誰に影響が及び、誰に謝罪に向かうのか。

それを逃れるにはどうしたら効率的か。いつも、そんなことが脳裏にあった。

気がつくと警察署の駐車場に停めた軽自動車の中で気を失っていた。

——はっ！ と気がついたのは、警備の巡査が窓をトントンと叩いたからだだった。

「大丈夫ですか？ 救急車を呼びますか？」

「いや、大丈夫です。すぐにクルマを出します」

大西は慌ててエンジンをかけ、アクセルを踏み込むものすごい音を出してクルマがガクンとなった。警官に怪しまれないように、顔を引きつらせながらにっこりしてその場を逃れた。もう、学校には帰りたくない。どこかへ行ってしまいたい。そんな気持ちに苛まれた。



## 5. ひとりの生徒



## 5. ひとりの生徒

大西は一日だけ休みを取った。  
教頭からは激しく責められたが、電話が通じないフリをして通話ボタンを切った。  
——ふうっ。  
ため息を漏らし午前中はふとんに潜り込み、眠ろうとしたが眠れなかった。  
目をつぶると、これまでに見た無残な遺体が頭をよぎり、心臓がドキドキしてきた。

何とか休みたい。  
目が冴えて時計を何度も見た。  
昼前にまたも電話が鳴った。  
留守電にして放置していると、教頭がメッセージを残していた。  
——またも生徒が亡くなったと。

「何なのよ！ ああ！」  
大西は独り言を漏らした。  
先日会った吉本りりかと話をしたことを思い出した。  
クラスの中のヤバい奴を消すために呪いの携帯だかアプリを使用したと言っていた。  
そして、呪った奴も誰だかわからないが、殺られてしまったそうだった。あのとき、吉本は呪いの相手をつきとめたのは「消去法」を使ったのではないかと言っていた。嫌疑のかかる人物をひとりひとり調べて行き、違うと思われる人物をリストから外して行く。最後に残った奴が犯人か、犯人に最も近い人物なのだろう。

大西はベッドから起き上がり、顔を洗って自分の机の前に座った。  
大きめの紙を持ち出しクラスのメンバーの名前を書き出して、誰と誰が近くて、誰と誰が仲が悪いかを線で示していった。

山本奈緒美は最初からいじめグループのリーダーだった。  
彼女ににらまれたらもう最後だと言うくらいの大ボスだ。大西は彼女の名前にチェックを入れた。山本の取り巻きが、その次に亡くなった青山ともみと川島麻里香だった。こ

の二人が狙われたとしても、それは不思議でもなんでもなかった。相当恨みを買っているはずだ。もし、そんな呪いのアイテムが手に入るのなら、あっという間に最初のターゲットにされてしまうだろう。

——ただ、そんなものがあるとすればだ。

吉本りりかは、その存在を示唆していた。確かに存在するみたいだと。大西は迷った。本当にそんな非科学的なものがあるのだろうか。

そして、殺人劇の第二幕だった、早川やおいと松島玲奈の二人だ。

山本奈緒美ほどの凶悪犯ではなかった。不良グループではなくどちらかというと、真面目グループに属している。成績は中くらい。そんなに目立つタイプではない。

大西は髪をくしゃくしゃとかきながら、紙を丸めた。

消去法でわかるほどのデータは持ち合わせていなかった。

ふと、気を取り直してさっきの留守電のメッセージを再生した。

教頭の慌てふためく声が入っていた。

やはり、二年二組の女子生徒が亡くなったと言っていた。今度は四人同時だった。近藤麻理、林綾佳《あやか》、塩原みちる、重本きやり《キャリー》だった。

——どうだったっけ？

大西は彼女たちの顔を思い浮かべた。普段は目立たないグループの子ばかりだった。確かに仲はいいみたいだったが、悪事を働くことはなく、学校で育てている野菜の水やりをしたり、ニワトリ小屋の餌やりなんかを率先してしてくれる子たちだった。

その子たちのなれの果て。

学校近くの池で底に沈んでいるのを通りかかった警官に発見されたということだった。

——また、遺体の確認と調書のルーティーンが待っている。

そう考えると立ち上がる気力も湧かなかった。

夕方になり、大西は起き上がった。

一日ぐっすり眠って疲れを癒やすつもりだったが、結局、一睡も出来ず却って状況を悪化させることになってしまった。誰かこの危機を乗り越える知恵を授けて欲しい。心からそう願うばかりだった。吉本りりかなら何かわかるだろうか？ と、彼女の顔が頭の中に浮かんだ。オカルトマニアは卒業したと言っただけだが、あんな呪いのアイテムに気を惹かれているのだから、ある程度は興味があるのだろう。それに理系だし少しは違った見解が示されるかも知れない。



少し迷って、大西は吉本に今晚にでも会えないかと連絡を入れた。

午後七時半。

前に会ったファミリーレストランの前で大西は吉本を待った。

すぐに彼女が自転車で現れた。

「ごめんね。りりかちゃん。急な呼び出しして」

「いいんです。あたしも何か先生の役に立ちたいと思っていました」

「そう？」

少しでも味方についてくれるのが嬉しかった。

彼女と並んで中に入り、案内された席に向かい合わせに座った。何を頼んでもいいと言ったものの、彼女は少し遠慮した。取り敢えずジュースとコーヒーだけだ。

「もしかしたら、何のお役にも立てないかと……」

彼女は申し訳なさそうな顔になった。

「いいの。何か気づきがあれば教えて欲しいの。これなんだけど」

大西は部外秘になっている生徒の名簿をバッグから取り出した。

名簿には名前と住所の他、家庭環境などのプライベートな情報と成績や性格や体格などがそのまま載っていた。亡くなったひとは名前の欄に線が引かれて抹消されていた。

「ひとつ気になったのが……」

「何々？」

大西は少しだけ期待感を持った。

「死んだ人って女子ばかりですね」

「ああ！」

「それと……ちょっと見せてください。あたしのときもこんなリストがあったんですか？」

と、きょろっとした目を大西に向けた。

「まあ、毎年のことだから。あなたのも当時はあったわよ」

「ふうん」

そして、吉本は名簿に載っている生徒の性格やクラス内での立ち位置や成績、容姿、体格などを細かに聞き出した。

「今も、あたしのときとそんなに変わらないとすると、いじめられるのは大抵『陰キャ』と呼ばれる子が多いと思います。陰気で貧相な子です」

「それはわかるわ。わたしの子供時代もそうだったもの」

「それとですね。……男子の前でだけ愛想のいいタイプも割と標的になりやすいんです。しかも、いじめっこリーダーの好きな男子にちょっかいを出していると認識された日に

はいじめは火に油を注ぐようなものです」

「ふうん。男子の前だけでねえ」

「だから、被害者は女子だけだったと思うのですよ」

と、吉本りりかは言い、ストローの端を加えてコップの中のジュースをかき混ぜた。

「あ、ああ。そういうこと？」

「だと思えます。そうするとこの名簿の中から、そんなタイプの子を選び出すと誰だと思えますか。先生？」

「待って！」

大西は吉本の手元の名簿を手に取りパラパラとページを繰った。

——誰だろう？ 山本奈緒美ににらまれ、その上、他の女子にまで徹底的に嫌われるような子なんて。

「この岡本紗千香って子。ちょっと気になりますね。先生」

「ううん。どうだろう。割と可愛らしい顔をしているわ。体格も平均的」

「性格はどうですか？ 男子や先生の前でだけ態度を変えるとかないですか？」

「ああ。それは当たっていきそうかも」

「あと、遠藤望都花《もとか》という子。この子はどうですか？」

「その子は……男子にも女子にも無愛想ね。そんなに美人でもないし。ただ成績はいいけど他には特に美点と言えるものはないと思うわ」

「ふうん。そうなんですわね。クラス名簿からわかる『いじめられっ子』はこの辺りではないでしょうか。他にも可能性はあると思いますが。あと、『陰キャ』タイプは誰だと思えますか？」

「坪中マキナかなあ。発言してるのを見たことないし、確かに陰気で貧相な子だわ」

——もし、これら候補者の中に呪いのアイテムを入手して使用した可能性があるとして……仮に考えたとしたら話だった。本当にそんなものが存在するのかわからないし、むしろ、現実的ではないと思えた。しかし、すでに九人が続けて亡くなっていた。同じ中学、同じ学年、同じクラス。それがこの一ヶ月にまとまって死ぬ。もはや偶然であるとは思えなかった。もし、そんなアイテムなしにこんな結果を残すことは出来るのだろうか？

「闇ウェブなんかを探すと、意外と引き受ける人もいるみたいですよ」

と、吉本は言った。高額のアルバイトという名目で参加者を募って実行犯を集めるそうだった。でも、一人二人を殺害するのならともかく、同じ中学の生徒九人を仕留めるなど、実際には難しいのではとも言った。

「ねえ、りりかちゃん。あなたの学校で呪いのアイテムだっけ。使われた形跡があると言ったじゃない？ あれって確信はあるの？」

「ううん。やっぱり、呪いのアイテムじゃないですか？ 確実に存在するのと言われてたらどうかなあというレベルですよ。例えば夜中の二時に神社なんかで、わら人形に釘を刺す人もいますよね。それで相手が病気で死んだり事故で死んだりしても、そんな呪いのせいにはされませんか？ それと同じだと思うんです」

「確かに、この全ての事故死や事件死には目撃者がいたわ。いなくなってそのままなんてケースは一件もなかった」

「ふうん。そうなんです」

「その呪いの携帯かアプリというの？ それが話題になったときってどんなだったの？」

「ああ。使った子の話ですか。確かに、もう、本気で悩まされていたときに、メールかメッセージが入ったというんです。『恨みを晴らします』的なものが」

「それって誰なのかな？」

「わからないんです。その子が死んだ後、相手の母親が購入して使ったと思われるんですが、それも、そんなアイテムの存在が前提になってしまったんですが、実際に事故に見せかけて殺されたとしても辻褄は合うんです」

「確かに……今回の死亡者も皆、暴走族に拉致されてレイプされて殺されたみたいな感じなのは一致しているのよ」

「その子。仮に岡本紗千香と遠藤望都花、それと、坪中マキナだとして、三人の行動を調べてみてはいかがでしょう。呪いのアイテムのありなしにかかわらず何らかの証拠か痕跡を残していそうな気がします。中二って見かけは大人な子も多いですが、中身はまだ子供だと思います。自分だけかもですが。あはは」



## 6. 呪いの連鎖



## 6. 呪いの連鎖

七月二日。火曜日。

一学期の授業も終わりに近づき、ホームルームの時間も期末テストの話題が増えて来た。事件はあれから一段落と言うのだろうか、特に何も起こっていない。問題は亡くなった生徒の親たちだ。人間一人亡くなるというのは、残されたものについては大変なことだと思う。突然いなくなるという事実と共に、初七日や四十九日の法要など仏事も欠かせない。もう家族の中だけの問題だとは思っているのだが、教師や教頭にも出席を求められることもあった。出なければ「冷たい態度を取られた」として区役所や教育委員会に苦情を入れられる恐れがあり、無碍《むげ》には出来ないという事情もあった。

そんな折りのこと。

大西は一人の母親からの相談を受けた。

六月に亡くなった山本奈緒美の件だ。

「確かに母子家庭で、自分が働きづめであり教育が行き届かなかったことは反省しています。でも、殺されることはなかったと思うんです。先生はどうお思いですか？」

と、真剣な顔で抗議されたのだ。

死んでしまえば、もう生徒の名簿からも除外されてしまうし、肝心の戸籍や住民票からも消えてしまう。要するに、もう自分の生徒ではなくなるのだ。それゆえ、遺族からの求めとはいえ公式には時間を取りづらい面もあった。

「こちらも目が行き届かず、申し訳ない気持ちで一杯です」

と、大西も頭を下げた。くれぐれもクレームにはならないようにと、教頭からも言われていた。

「娘の亡くなった場所のことなんです。八王子の北側の山地だったんですが、あの子にそんな所の土地勘なんてないはずなんです。暴走族のクルマに拉致された？ それもあり得ません。普段は大人しい子でした。そんな人たちとのつきあいがあるなんて信じられないのです」

と、中学で管理しているファイルの内容とは違うとらえ方だった。

でも、そんなものだと思う。亡くなった人の評価なんて人によって全く変わるのだから。少なくともクラスのいじめられっ子からは鬼のような存在であると共に母親にとっ

ては天使の様な存在だったのかも知れない。母親想いの娘。家事をこなして成績もそこそこ、容姿もそれなりによかったのだ。

「お母様。行きずりの犯罪に巻き込まれたこともあるのではと思うのです。ときとして運が悪かったと思うようなこともあります。でも、何か変わったことがあったのですか？」

大西は相手の表情から何を言い出すのか注意しながら言葉を選んだ。

「好きな男子がいたようなのです。その子の話をするときだけ娘は生き生きしていました。楽しくてしょうがない。そんなことってありますよね」

「男子ですか？」

大西はそのことは把握していなかった。

心の中だけで想いをよせる、いわゆる片思いに過ぎなかったのかも知れない。

「クラスのSNSで告白したみたいでした。相手もそんなに嫌な態度ではなかったと。事件はその直後のことでした。今でも悲しくて悲しくて……」

母親は泣き始めた。

彼女が帰った後になり、大西は密かに調査を始めた。

そして、第四の事件が発生した。

学校帰りに大きな交通事故があり、またも二年二組の女子生徒が巻き込まれたと言うのだ。警察署からの連絡では持ち物から四人が特定されているが確認に来て欲しいと言う。

「はい？」

大西は職員室で電話を受けながらメモを取った。

「西尾ひかる。和田山詩織。白野華中紗《しろのかちゅーしゃ》。遠藤望都花。はい。確かにこちらの生徒です。え？」

大西は遠藤の名前があることにドキリとした。

先日、吉本りりかに意見を求めたときにいじめられっ子として名前が挙がっていたからだ。今回、誰かに呪われたとすると、彼女が加害者だという説は排除された。警官は電話口の向こう側でさらに名前を読み上げた。

「別の場所での事故です。今情報が入りました。坪中マキナさん。これもそちらの中学ですネ？」

「ええっ？　彼女も？」

坪中は陰気なキャラで、クラス内では定常的にいじめの対象になっていたはずだった。だとすると誰が呪いのアイテムを行使したのだろうか？　大西は電話を受けながら片手でクラス名簿を繰った。



二年二組の女子で残ったのは、もう一人の候補者である岡本紗千香だけだった。  
クラスは完全に壊滅状態だった。  
あの子しか考えられない。

電話を切った後、大西は岡本紗千香を職員室横の面談室に呼び出した。

「あなた。何か知っているの？ 正直に答えなさい！」

大西は毅然とした態度で彼女を詰問した。

もう、彼女しか考えられない。

大西の詰問に対して彼女はずっと下を向いていた。睫毛《まつげ》の先から涙がポロリポロリと落ちて床の上に模様を作った。

「ちょっと……あなたのスマホを見せてくれるかな？」

「あ、いや。それは……」

大西は彼女にきつく命じた。いやいやながらの態度で彼女は自分のスマートホンを差し出した。画面はロックされていたが、そんなに暗号解読ほど難しいものではない。彼女の誕生日か生徒番号か電話番号かがパスコードだ。何度か入力して解除した。

クラスのSNSの中で彼女は陰湿ないじめを受けていた。

——放課後、校舎裏の柳の木の下に來い。

とか言ったメッセージが続いていた。山本奈緒美からの命令だった。

行った先で、罵声を浴びせかけられたり、蹴られたり殴られたり。

そして、最後は山本の財布が体育の授業中になくなったことがきっかけだった。

そのときのリンチの様子が動画に撮られていた。撮ったのは山本奈緒美の手下である青山ともみらしかった。

「あんたがやったんでしょう？ わかっているのよ。今日の体育の時間、あんた見学だったでしょう？ アリバイがないのはあんただけなのよ」

「あたしじゃありません」

と、動画の中の岡本は泣きながら抗議していた。

「そう？ 本当？」

「はい。本当です」

「だったらここで服を脱いでみなよ。身の潔白を晴らせるかも知れないわよ。ふふん」

山本はじわじわと岡本を締め上げた。彼女は泣き始めた。

「泣いたって駄目だよ。おい、あんたたち。やりな！」

山本は手下二人に命じた。

抵抗する岡本を地面に押さえつけ、制服のボタンを外し、下着も脱がして素っ裸にした。そして服のポケットを念入りに調べ上げた。財布は出てこなかったが、その代わりに小さな紙片を折りたたんだものが出て来た。岡本紗千香が男子生徒に宛てて書いた手紙だった。山本はそれを広げて目を通した。その瞬間、彼女の目つきが険しくなった。

「あんた。地味キャラのくせに何書いているのよ？ ええ？」

山本はドスの利いた声で彼女を詰問した。どうやら、山本の好きな男子への手紙だったらしい。火に油を注ぐとはこのことだった。

「あんた。ここでオナニーしてみなよ。面白そうよね」

「そ、そんなこと出来ません」

「ふうん。毎晩、乾拓海《いぬいたくみ》のこと想像して一人でエッチしているんでしょう？ このメス犬っ！」

山本の怒りは凄まじかった。

動画の中の岡本は三人たちから、凄まじい暴力を受けていた。

そのとき教師にバレない様に顔に傷をつけないよう、巧妙な配慮も見せていた。

大西は他のメッセージにも目を通した。

この事件の後、岡本は執拗に追い詰められていた。

——裸になった動画をネット上に拡散する。面白そうだよね。嫌だったら放課後に校舎裏に来い！ と、毎日の様に呼び出されていた。そして、最後の日、岡本は要求を無視した。山本奈緒美が亡くなる前の日だった。

「呪いのアイテム。そんなものが本当にあったの？ 岡本さん」

大西の質問に彼女はなお一層泣き始めた。

吉本りりかの情報通り、闇《ダーク》ウェブで手に入れたという。五万八千円と高かったがこれ以上のいじめには耐えられない。親のクレジットカードを使ってアプリをダウンロードして、表示される通りに呪う相手の情報を入れていったと語った。

「すみません。奈緒美ちゃんを呪ってしまいました。でも、正当防衛ですよ。あたし悪くないですよ。何か間違っていますか？」

と、彼女は泣きながら自身の行為を正当化した。

「他の子たちも呪ったの？」

「奈緒美ちゃんたちのグループには消してもらいました。これで平和な中学生活が取り戻せたと思ったんです。でも、実際には違いました。今度は早川やおいちゃんたちのグループがいじめを始めたのです。……でも、彼女たちって奈緒美ちゃんがいたときには、あ

たしと同様にいじめの対象になっていたんです。なのに、いなくなった途端に今度はいじめの側に立ったんです。信じられませんでした。少しは痛みのわかる子だと思ったのに。これも正当防衛ですよ。先生」

大西はそれを聞いてため息を漏らした。

正当防衛？ 確かに法律上、そんな言葉もあるにはある。

しかし、あくまでも正当なものでなくてはならない。単に殴られたのなら、殴り返すまでが限度だ。相手を崖から墜落させて死に至らしめたり、交通事故でバラバラ死体にしたり、そんなところまでは認められる訳がなかった。

「全部あなたが呪ったの？ 正直に言いなさい！」

「.....やりました。でも」

「でも？ まだ言い訳をするの？」

「遠藤望都花ちゃんと坪中さんは呪っていないんです」

「ええ？ まだ言い訳？」

「違うんです。あたしをいじめる相手は全て排除しました。それは認めます。でも、この二人はやっていないんです。本当です！」

——もしかしたら.....。

大西の理解の度合いを遙かに超えていた。

吉本りかの話では、友人は相手を呪ったには呪ったものの相手の母親から逆に呪いをかけられて死んでしまったと言っていた。もしかしたら、この一連の事件の裏事情に気づいた誰かが、犯人と思しき生徒に呪いをかけ返したのかも知れなかった。

確かに、遠藤望都花と坪中マキナは、吉本に相談したときに名前が挙がっていた。



## 7. 最後の命



## 7. 最後の命

七月五日。金曜日。

午後七時に大西は吉本りりかといつものファミリーレストランで待ち合わせしていた。

この時期、彼女が通っている専門学校でも試験期間らしく、忙しそうだったし、大西自身も中学の期末試験に差し掛かる直前でもあり時間的にも余裕が全くなかった。この土日を試験問題作成などの時間に充て、何とか乗り切るつもりだった。事態は急を要するものだった。二年二組の女子が岡本紗千香をのぞいて全員がいなくなってしまったのだ。

そして、もうひとつ気がかりなことに男子生徒の中にも、ここ二、三日顔を見ていない子がいた。一刻も早くこの呪いの連鎖を止めなければならないと大西は心から思っていた。

ドリンクバーのコーヒーを飲みながら窓の外を眺めていた。

ライトをつけて走るたくさんのクルマ。そして、オートバイ。

皆、帰宅途中なのだろうか。これから仕事の人もいるだろう。普通は家を出たら夕方なり朝方なりにちゃんと戻ってくるものだ。まさか、帰ってこない。出かけるときに見た姿がこの世での最後だったとは、ほとんどの人は思うまい。そんなことは極めて稀な事象なのだ。

しかし、その極めて稀な事象がこの一ヶ月間に立て続けに起こっていた。

確率的にはあり得るのだろうか？ 確かにゼロではなさそうだ。数字としてはだ。

確率的にゼロではないとしても、実際に起こるのか。

やっぱり、あり得ないと判断するのがまともだろう。

サイコロを三回振って一が三回出たとしても、普通は誰も不審には思わないものだ。しかし、百回振って百回とも一が出たとしたら？ もう、サイコロに細工がしてであると誰しも判断する。どんなメカニズムが内部で作用しているのか。そんなことはどうでもよくなり、ただ、結果のみに人は着目してしまう。

この呪いのアプリ……と岡本紗千香は言ったが、これがどんなメカニズムなのかは、もはやどうでもよくなっていた。重要なのは実際に生徒が亡くなってしまったことだけだ。

コーヒーをお代わりに行った所で外の駐車場の片隅に吉本りりかが自転車で到着したのが目に入った。大西は自分の席にカップを置き、ファミリーレストランの入り口に近づいて行った。

「あ、先生。待ちましたか？」

と、彼女はいつもの通りの笑顔で尋ねた。

こんな子ばかりだと先生稼業も楽しいし、やりがいも感じるものだ。

しかし、実際にはそんなことは滅多にない。

「ううん。今来た所よ。お腹空いていない？ 何か食べる？」

「いいですか？」

「うん。何か食べよ」

ハンバーグセットと飲み物を目の前にしばらく雑談をした。

勘のいい吉本は大西の用件をあらかじめ察していたみたいだった。話は自然と中学校の生徒たちの命に向かった。

「結局の所、犯人はこの間リストアップした子だったのですね」

彼女は深刻な表情になった。

「でも、全部じゃないって言うの。多少は言い訳もあるのでしょうけれど、可能性の問題を考えると……もし、他の誰かが同じことをしていたら、それこそ大変なことになると思うのよ」

「それはそうですよね。やっぱり、呪いのアイテムが実在するとお考えなんですか？」

「呪いのアイテムの中身がどうなっているとか、そんなことはどうでもいいの。そんなこと考えても科学的には説明出来ないでしょうし、警察にも相手にはされないわ。でも、結果だけみても、ものすごく深刻だわ。それに、男子生徒の二人がこの間から姿を見せないしね」

「え？ 女子は全滅なんですか？」

「一人だけ残っているけど」

「ああ、岡本紗千香ですね」

「誰かが、この呪いの存在を感知して、やり返すとか……遺族の方や友達なんかが入手して使ったとすると、この件は収拾がつかなくなると思うの」

「確かにそうですよね。うちの専門学校でも被害者が二人ですんだのが不思議な気がします」

「あのアイテムを防ぐか止めてしまうことって出来ないかな？ 科学的でもオカルトでもいいわ。何かないかな？」



吉本りりかは、真っ暗な中自動車のライトだけしか見えない景色を少しの間眺めた。そして、下を向き肘をテーブルの上について考え込んだ。

「先生。あたしもこの一件のこと……専門学校での事件からあとに、ずっと追っていたんです。ネットの掲示板の書き込みや闇《ダーク》ウェブ内でのアングラ情報なんかを。それで被害がかなりの範囲で広がっていることを心配していたんです」

「何かわかったの？」

「はい。とある霊能力者が祈祷みたいなことをして人を呪い、その呪いの依頼をとある業者が世界中から集めてお金と引き換えに霊能力者の所に持って行くみたいなことが商売として動いているみたいなんです」

「彼らか彼女らかはわからないけど、その人たちを説得してやめさせることは出来そうなの？」

「海外のサイトですし、日本の法律も及びませんし、どんな人なのかもわかりませんし、正当な方法では彼らを止めることも、処罰することも出来そうには思えないんです」

「ちなみにどんな会社……と言っていいのか、どんな組織なの？」

「これまで得た情報を総合すると『黒魔術合弁公司』という東南アジアのどこかを拠点にしている業者みたいです。出てくる名前は一人だけで、マリア・ガルボという女性です。それをシンガポールの霊能力者でチン・セイケンという人に持って行くと言った感じでしょうか。この人は中国系か華僑みたいです。多分、この二人がメインだと思います」

——大西はそれを聞き考え込んだ。

犯罪として検挙するには最も難しい案件だ。

海外の単独業者たち。そのつながりもはっきりとはわからない。

日本か現地の弁護士を通して話をすることは可能だろうか。いや、可能ならすでにやめさせられているだろう。いかにオカルトチックな存在とはいえ、人を呪う専門の業者が大ぴらに商売が出来るほど、社会の構造はカオスではないはずだ。

「その霊能力者が祈祷をして人を呪う。そして人が死ぬ。これって確かなの？ りりりちゃん」

「ネットの情報なんです。確かな訳がないと思います」

「でも、この呪いのアイテム自体がネット上の想像の産物だったんでしょう？ しかし、実際に存在していたと。そしてちゃんと機能していた。代金なりの効果が」

「それはそうですけど。……でも」

「何かあるのね。対策が」

「こんなこと言うと、悪魔の化身みたく思われるので言わなかったのですが……」

「言ってみて。お願い！」

「この業者と霊能力者の二人をこのアイテムで呪って見たらどうなるだろうかって、考えたことがあるんです。本人には効かないかな。その場合の呪いは自分に返ってくるのかなって」

「ああ！　そう言うこと？」

確かにこの呪いのアイテムが実在して、その人を殺めるという機能だけが一人歩きしているのであれば、ありえる方法だった。問題はその霊能力者が祈祷をすることでのみ、呪いが作用するのかと言う点だ。自分に対する呪いなど、誰しもかけたりはしないだろう。

大西は悩んだ。

家に帰ってからずっと考え込んでいた。

ブツは手元にある。岡本紗千香から取り上げたスマートホンだ。

彼女のを使うと本人に災厄がかからないとも言えないだろう。なので、使うとしたら自分のスマートホンにアプリをダウンロードして使う方がいい。どこからかは、岡本のスマートホンにリンクが残されていた。

これを元に自分のスマートホンをセットアップする。

クレジットカードのナンバーを入力してアプリが認証された。

いつでも使える状態だ。

——本当に吉本りりかの言った人物に呪いをかけたら彼らがこの社会から排除されてしまうのだろうか。アプリから送られてきた名前を見て、実行しない可能性が十分に考えられた。そのときには、呪いだけ叶わずに自分に災厄だけが戻ってくるかも知れなかった。

しかし、今、残った十五人の二年二組の生徒たちを守るには他に方法が思いつかなかった。

彼らの命？

今まで人の命を飯の種にしてきた奴らだ。考える必要はないと思った。

ふと、部屋の時計を見た。

深夜0時。

何を長い間逡巡していたのだろう。

アプリをインストールしてアクチベーションし、名前を入力することだった。

五分とかからない。なのに、三時間も考え込んでいたのだ。

——悩むことはない。生徒たちの命をこれ以上奪われないうちに。

送信ボタンを押すのを一瞬だけ躊躇した。

その瞬間。スマートホンが着信メロディーを奏でた。

この時間に誰だろう？　　と、思って表示を見た。吉本りりかからだった。

「先生ですか？　　まだやってないですよ？」

「これから押すところよ。安心して。災厄はわたしで終わりにするから」

「そうじゃないんです。ひとつ思いついたんです」

「ええ？」

吉本は話の後半、涙声になっていた。

ずっと考えてくれていたのだろう。どうすればこの呪いの連鎖を解くことができるのか。大西は誰かが犠牲になることでストップするという選択を採ったのだ。

「こちらからマリア・ガルボのサーバーをウイルスで破壊したらと思うんです」

「ウイルス？　　そんなもので呪いが解けるのかしら？」

「違うんです。マリア・ガルボとチン・セイケンとは別の所にいます。ネットですのでどこにしようが関係ないと思ったんですが、実際には顔も見たことがない可能性すらあります。もし……」

彼女の説明は的を射ていた。

マリア・ガルボのサーバーのデータが飛んでしまっ、誰に何を幾らで売ったのかわからなくなったら？　　チン・セイケンはどうするだろうか。もう、誰から金をもらったのかわからないのに、誰それを呪ってくれという命令が届いても、それを実行すべきかどうかの正否が確認出来ないのだ。

当然、商売にならなくなる。

客と自分との間を取り持っていた仲買人との間柄が切れてしまう。

もう、自分の祈祷所にじかにお願いに来る人しか相手には出来なくなる。

従って新たな「呪いの依頼」は受け付けられない。

「本当？　　りりかちゃん？」

「マリア・ガルボとチン・セイケンがネットだけの繋がりだとしたら、この方法はいけると思うんです。……それに」

「それに？」

「マリア・ガルボとチン・セイケンとは必ずしも個人ではない可能性もあります。企業ほどではなくても、何人かの祈祷師グループかも知れません。そうすとなおさら、このネットワークは重要になります」

「呪いが無力化されると言う保証はあるの？」

「保証は出来ません。所詮ネット上だけの世界です。でも……しばらく様子を見たらどうでしょうか。先生が命をかけるほどの価値はないと思います」

「ありがとう。心配してくれて」

結局、大西はしばらく様子を見ることにした。

七月十日。水曜日。

期末テストは順調に行われた。

二年二組は男子十五名、女子一名に減ってしまったが、それ以降の惨劇は起こらなかった。

まだ、油断は出来ないかも知れない。

そして長い夏休みが始まった。

大西も教頭に願い出て、二週間のまとまった休みを取らせてもらった。もう、精神的にも肉体的にもギリギリの所だったのだ。——たまには帰省しようかなと思った。田舎に帰ってのんびりしたい。

幸い休職中だった早川俊樹教諭が二学期から復職するという知らせがあった。

当面は試運転みたくぼつぼつと復帰する形にしたらと教頭は言っていた。

それに早速の仕事があった。一学期に亡くなった生徒たちの初盆だった。お参りには彼に行かせることにした。了



---

呪いのメールアプリ

---

著 黒川文

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---